
【CLANNAD二次創作SS】坂上智代長編？

坂上智代は俺の妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【CLANNAD二次創作SS】坂上智代長編？

【Nコード】

N8591M

【作者名】

坂上智代は俺の妻

【あらすじ】

CLANNAD二次創作

（前書き）

私が辛い時間を耐え弟との約束を守れたのはアイツとの夢のような楽しい思い出があったからだろう。

だから、私は耐えることが出来たんだ。

アイツとの思い出は全て大切な宝物。

それは何があるうと変わらず、永遠に色褪せない私だけの大切な宝物。

【CLANNAD二次創作SS】

坂上智代編

それはたった一ヶ月の出来事。だけど大切な思い出。他人から見ればガラクタかも知れない。無価値かもしれない。虚空であったのかとさえ思う時がある。

でも、それは確かに私の心の中にあつた。ずっとずっと私を支え続けてくれた。だから、前だけを見て走り続けることが出来たんだ。あの大切な思い出があつたから。長い時間を耐えることが出来たんだ。あの幸せだった時間を……信じる事が出来たから。

いつからなのだろうか？ 休み時間になるとあいつの姿を探すようになったのは。

朝あいつを起こしに行つて、一緒に登校して……たくさん話をした。

だけど、それでも学校に着いて授業が始まると離ればなれになってしまう。あいつは……ぐっちは三年生だからな。ぐっちと出会つたのは少し前のことだ。

春からこの学校に転入してきた私に、ぐっちの友人である春原陽平という男が色々嫌がらせしてきたことがきっかけでぐっちと知り合った。

ぐっちは私にとってどうしてかわからないが、話やすい相手だった。あいつと居るとなぜか心が穏やかになる。

クラスの連中とは違う雰囲気を持っていたから。ただ、それだけだと思っていたのだが……。

授業中も気づくとぐっちのことを考えていた。あいつのことで頭

が一杯だった。

無論、ノートはちゃんととっていたんだぞ。それは大丈夫だ。でも、集中力は欠けていたな。

一度、先生に当てられたのだがそのことに気づかなかった。友達が当てられた箇所を教えてくれたから、なんとか答えることができたが……。

生徒会長を目指す私にとってこれは少し困ったことだ。

生徒会長を目指す人間たるものの上に立つて恥ずかしくない人間であらねばならない。成績が良いとか運動神経が良いとかそういうことではない。それに関わる「姿勢」が大事だと私は考える。結果はその後からついてくるものだ。「この人間にならついて行きたい」そう思われる人間に私はならない。

それでも悪い気はしない。何かこう……頭のとっぺんが暖かいような、胸の奥がキュツと縮むような……。

不思議な気持ちだ。自分がこんな気持ちになるなんて思ってもみなかった。

私はずっと……荒れていたからな。ぐつちによるとあのころの私のが伝説になっているらしい。

学校を丸々ひとつ壊滅させたとか、素手で熊を倒したなど色々と噂されているようだ。

見るものすべてが憎らしく思えたことさえあったからな……。噂は大袈裟だが……概ねその通りだ。

だから、こんな不思議な気持ちになる女の子らしい最近の自分は好きだ。昔の自分なら想像すら出来なかっただろう。

そんなことを考えながら廊下を歩いているうちにぐつちのクラスまで来てしまった。

ぐつちはなにをしているのだろうか？ 相変わらず春原の馬鹿とくだらない話をしているのだろうか？

教室の中にぐつちの姿は見当たらなかった。

「坂上？」

ぐつちのクラスの男子が私に気付いて声をかけてきた。

「ぐつちと春原なら居ないぞ」

「岡崎か、春原はどうでも良いのだがぐつちは……ぐつちはどこに行っただろうか？」

岡崎朋也……ぐつちと春原の友人で、ぐつちの友人の中では最もな方だ。私の友人、古河渚の彼氏でもある。

「さあ、そういえば授業が終わると同時に出ていったな」

岡崎は不機嫌そうだった。また、ぐつちと喧嘩でもしたのだろうか？ 最近なぜかぐつちと頻繁に喧嘩しているらしい。

「じゃあ俺、学食だから……」

「ああ」

あいつは、もしかしてまた早退する気なのだろうか？ そう云えば朝も学校へ行くことをえらく渋っていた。

「家に帰ってまた寝るつもりかも……」

私がつぶやくと……。

「いや、違うねっ！」

背後から聞きたくもない声が聞こえてきた。春原だ、ぐつちの友人で転入してきたばかりの私に何かと嫌がらせをしてきた男だ。

髪は金髪、当然校則違反だ。顔には何時もだらしない笑み。制服も何時もぐしゃぐしゃ。

誰の目から見ても本当にどうしようもない奴だ。ぐつちと岡崎は、なぜこんな馬鹿な奴と友達なんだろうか？ 不思議で仕方ない。

「それで何が違うと言うんだ」

本当はこんな奴と話をしたくないのたが……。

「いやー、見ちゃったんだよねえ」

春原が下品な笑みを浮かべながら私の顔を覗き込む。

「何をだ？」

思わず聞き返してしまった。くっ、ムカツク。いらいらしている私の様子を楽しむように、そっぽを口笛を吹く春原。

「いいから、早く云えっ！」

思わず語気が強くなる。

「それが人にものを頼む態度ですか？ 智代ちゃん？」

勝ち誇ったように笑う春原の姿に私は……。

げしっ！

「ぎゃあああーっ！」

悲鳴とともに宙を舞う春原。思わず蹴ってしまったじゃないか……

……。廊下につく伏している春原を拾いあげ、壁に立てかける。

「それで何を見たというんだ？」

「ひいっ！ 言います、言いますから命だけはお助けを！」

ぶるぶると震えながら頭を下げる春原。初めから素直に話していれば、こんなことをしなくてすんだのに。

そう忠告してやろうとも思ったが、やっぱりやめた。そんな忠告

でこの男が反省するなら、この男は春原ではない。きっと偽者だ。

だが、私の見立てでは目の前のこの男は春原だ。こんな馬鹿が他にいるはずない。つまり忠告しても無駄ということだ。

「何を見たんだ？」

こんな馬鹿のことを何時までも考えても意味がない、というより考えたくもない。

とにかく話を聞こう。私に促されると、春原は私の顔色をうかがいながら、おずおずと喋り始めた。

「そ、その今日も智代先輩に起こしていただいて……」

この男も一応ぐつちの友人ではあるからな、特別にぐつちとふたりで起こしに行つてやつたんだ。

因みにこの男もぐつちと同じ三年D組。もちろん、私の後輩などではない。

「おかげさまで授業中も眠くて仕方なくて、それで、その……部屋に戻って寝直そうと思って……」

「せっかく私が起こしてやったというのに、早退するつもりだった

んだな！」

「ひいっ！　すみません、すみません」

春原は悲鳴を上げ、何度も頭を下げた。

「もう早退しないと約束するなら怒らないから、先を続ける」

「もったいないお言葉ありがとうございます。智代先輩」

「その先輩というのも止める」

春原の関係者みたいで不快だ。私が右足を少しだけ前に出すと、春原はこくこく頷いた。

「続ける」

「は、はい。それで校門を出て坂を下っている途中で見たんです」
「だから、何を見たと言うのだ」

この男と話をしているとイライラしてくる。

「ぐつちが女と楽しそうに話しているところを見たんだ！」

突然、叫び声を上げる春原。

「げしっ！　げしっ！」

「ぎゃあああーっ！」

悲鳴とともに立てかけられていた壁にめり込む春原。いきなり大声を上げるから蹴ってしまったじゃないか……。

「……あんた鬼っスね！」

残念だがまだ生きているようだ。

「お前がいきなり大きな声を出すから悪いんだぞ」

「ふふーん、やっぱり動揺は隠せませんか？　そうだよねえ、大好きなぐつちが他の女と楽しそうに話したら、流石の智代ちゃんも心配で心配で仕方がありませんでしたとさ」

やはり息の根を止めておくべきだったか。

「早く行った方がいいんじゃないの？　智代ちゃんと違って可愛い子だったぜ」

壁にめり込んでいる癖にヘラヘラと笑う春原。

つまり……。

「お前はそのことを私に話して、私の反応を見て喜ぶつもりだった

んだな。そのために早退するのを止めて戻ってきたというんだな。
私の女心をもて遊ぶつもりだったんだな」

「へっ！？ い、いや、そんなつもりは……」

げしっ！ げしっ！ げしっ！

「ぎゃあああーっ！」

春原の断末魔の絶叫が廊下に響き渡った。

いったい私は何をしているんだろう。春原の馬鹿の言葉になど耳を貸す必要はない。

わかつているはずなのに、私は思わず校門をくぐってしまった。
休み時間は残りわずか。授業に遅れる訳にはいかない。わかつているはずなのに……。

校門をくぐるとそこから坂道が続いている。桜並木の坂道。この桜が私は好きだ。思い出深い場所でもある。

今はもう花が散り、葉桜になってしまっているが来年もきっと綺麗な花を咲かせてくれるだろう……弟と「来年も再来年もそのあともずっと家族みんなで花を見よう」と約束したから。それは命よりも大切な約束。

変わらないモノなんてない、当たり前のことだ。それでも失いたくはなかった。

昔の私は両親の不仲を言い訳にして荒れていた。ずっと、どうしようもない姉だった。

家族から逃げ回って当たり散らしてばかりだった。……そのせいで弟は家族の犠牲になった。

だから、私は何があるうと全てを犠牲にしてもこの桜並木を守らなければならない。

それが弟に出来る唯一の罪滅ぼしだから……もし私が桜並木を守れたらもう一度やり直せる気がした。

でも、この桜並木は来年にはなくなってしまう。私はそれを防ぐため光坂高校に転入して生徒会長を目指している。

ぐっちは生徒会が嫌いだ。私達の関係は私が生徒会長になったと同時に終わる。

お互いに譲れないものがある。だから仕方のないことなのだろう。でも、せめて生徒会長になるまでは……ぐっちと一緒に居たい。だから私は休み時間が終わったにも関わらずぐっちの姿を求めた。

春の柔らかな風に葉桜が揺れた。

「!？」

不意にふたりの男女の姿が視界に飛び込んできた。ぐっちと親友の渚。

私は思わず足を止めていた。渚はふるふると震えていた。私には無い守ってあげたくなるような、まるで小動物のような女の子らしさを持っている。

「ぐっちさんと……会えたから、また登れます」

渚は愛らしい笑みを浮かべた。

「いや……その、岡崎と喧嘩したって聞いて。……まあ、なんて言うか……偶然だ。ちゃんと仲直りしろよ」

岡崎の機嫌が悪かったのは渚と喧嘩したからだだったのか……少し心配だ。しかし、友人のためとは云え早退はいけないことだ。これは、後でぐっちに説教をしなければ駄目だな。

「……あんばん」

これは、渚オリジナルの困った時に頑張れるように……それが解決したら「自分へのご褒美」と奮起するための掛け声だ。すごく女の子らしくて可愛いらしいと思う。

でも、前にぐっちの前で試したら……似合わないと言われた。ぐっちは本当にデリカシーが欠けていると思う。

「またそれか」

ぐっちは苦笑した。

「えへへ」

ふたりの会話が聞こえてくる。渚の笑顔にこたえるように、ぐっ

ちも笑う。まるで、恋人同士みたいだ。

チクリと胸の辺りが一瞬痛んだ。そして、左の胸が苦しくなった。

ふたりは、ゆっくりと坂道を登ってきた。会話に夢中になっていたのか、私に気付くのが遅れたようだ。

「ん？ 智代？」

ぐつちが立ちつくしている私に声をかける。隣にいる渚は無意識にだろ、一歩後ずさりぐつちの後ろに隠れるような素振りを見せる。

「……どうしたんだ？」

ぐつちの表情はぎこちなかった。私が休み時間はいつもぐつちのクラスに行くことを知っているクセに、そんなことを言う。

「なんだ、それは嫌味か？」

イヤな感じの声だ。荒れてた昔の自分に戻った気分だ。良くないことと分かっているが……疑心、嫉妬心を抑えられない。自分の中で様々な負の感情が暴走しているのがわかる。今にも自制心が崩れ弾けてしまいそうだ。

「なにが、言いたいんだ？」

ぐつちはあからさまに不機嫌な顔をした。それが、また私の胸を苦しめる。

「私と一緒に居てくれるんじゃないのか？」

またイヤな声。約束した。生徒会を目指す私が、生徒会の一員になるその日までぐつちと一緒に居てくれると。だけど、それは……

「ああ、確かに、だけど……」

それはわかってる。そんな約束でぐつちを束縛したいなんて考えていない……。そのはずなのに……。

「私を騙していたのか？」

自分でも気付かないうちにそんな言葉が口をついて出ていた。ぐつちの目付きが厳しいものになる。

ぐつちの後ろに隠れるようにしている渚は、どうしていいのかわ

からず困っているだろう、一步、前に踏み出そうとしては後ずさりし、また前に踏み出そうとしては、後ずさりの繰り返しだった。その場所は私だけのもののなに……。
「それに……」

また無意識のうちに口が動いていた。自分の中の冷静な私は、勝手に言葉を発する自分を止めようとしているのだが……それは叶わなかった。

「渚は今、登校してきたふうだが……もしかして遅刻か？」
親友だろうと関係ない。そこは私だけの居場所だ！ 私の居場所を奪うなら容赦しない。

渚はぐつちの制服の裾をキュツとつかみ、うつむいてしまう。

「渚は、その……いろいろ事情があるんだ」

ぐつちが渚をかばうように言う。

ぐつち……私以外の女性に優しくしないで欲しい……他の女性など見ずに私だけを見てくれ。

「事情？ 病気か？ 先生には遅刻することは伝えてあるのか？」

私はイヤな女だな……自分でも嫌になる。

「そんなこと、どうでも良いだろ」

ぐつちの語気が少しだけ強くなった。

「遅刻は悪いことなんだぞ」

ぐつちとこんな言い争いなどしたくはない。それなのに自分を止めることが出来ない。

「……あの、すいません。遅刻は悪いことです」

意を決したように渚が口を開いた。渚の足は震えていた。

「渚……」

ぐつちが渚の顔を覗き込む。どうして渚なんだ？ なんで私だけを見てくれないんだ！？

「三色パン」

渚が、小声でつぶやくとそれまで厳しい表情を浮かべていたぐつ

ちの顔が少しだけやわらかくなった。

「グレードアップしたのか？」

「……はい」

ぐつちに声をかけられ、渚は笑顔でこくりと頷いた。心臓の鼓動が早くなる。息が苦しくなる。ふたりを見ているのが……辛いだ。

「ごめんなさいです。もう……出来るだけ……遅刻しないように頑張ってみます」

渚が私に頭を下げる。

「渚もこう言ってることだし、許してやれよ。ほら、もう休み時間も終わってるし……」

ぐつちがとりなすように言う。ぐつちの表情はやわらかい。私が渚を許せば、それで終わり。それでこのイヤな感じも収まるはず。それなのに……。

「駄目だ、言葉だけでは信用出来ない」

……。

私はどうしてしまったのだろうか。悲しげにうつむく渚。やわらくなっていたぐつちの表情がまた強ばる。

「……意味わかんねえ」

ぐつちが静かに言った。

「どうということだ？」

私は反射的に強い口調で聞き返していた。

「お前の態度がだよ、『言葉だけでは信用出来ない』ってなんだよ？」

「言葉通りの意味だ」

発したくない言葉が次から次へと口をついて出る。

「私は本気だぞ」

「ああ、本気だろうよ。お前は自分のやり方を押し通すもんな。それは凄いことだと思う。けど、相手の事情ぐらいきいてやれよ」

「遅刻は悪いことだ」

「ああ、悪いことなんだろうな。でも、渚は九ヶ月も病気で学校休んでいてそれで友達みんな卒業しちまって、学校に行きづらくなつちまって……それを救ったのが岡崎なんだ。それはお前も知ってるだろ？ その岡崎と喧嘩して……」

渚はぐつちを見つめていた。苦しい、すごく苦しいんだ。やめてくれ、ぐつち。やめて……欲しいんだ。

「そんなことは関係ないっ！」

自分でも驚くぐらい大きな声を出していた。

「か、関係ないって……お前……」

ぐつちも驚いていた。渚は今にも泣き出しそうだ。

「遅刻は悪いことだ。私は正しいことを言っている」

いや、これは正しいことではない……悪いのは私だ。自分でもそれは理解している。

でも、何故か感情が制御出来ず……渚に酷いことばかり云ってしまふ。私は最低だ……。

「……お前は正しいことを言っているかもしれない」

ぐつちは怒っていた。それは当然のことだと思う。違うんだ、私はお前と言い争いなどしたくないんだ……。そう思っているてもそれが言葉にならない。

「けど、お前は女の子らしく扱われたっていつも言ってるよな？」

ぐつちは私に対してデリカシーが欠けている。だから、その度に「私だって女の子なんだぞ」と言って注意したことは数えきれない程だ。

「……」

ぐつちの問いに言葉を返すことが出来ない。いや、寧ろぐつちの声が遠くから聞こえるような……そんな感じがして今という時間が現実には思えない。

もつひとりの私がぐつちを怒らせ、それを別の私が遠くから見ている。例えるなら、そんな感じだ。

希望を胸に抱き、試しに頬を軽くつねってみるが……頬に痛みを感じた。残念ながら夢じゃないようだ。

「……そんなんで女の子らしくなんて扱ってもらえるのかよ？」

ぐっちの言葉が胸を通り過ぎていく、ぐっちの目の前に立っている私の胸を言葉が風のように通り過ぎていく。

言葉を発することが出来ない。遠くからぐっちを見ている私は何が起こっているからわかっていた。でも、ぐっちの目の前に立っている私は言葉を発しようとはしない。

「行こうぜ、渚」

ぐっちが渚の手を引く。

「え、でも……」

戸惑う渚。だが、ぐっちは渚の手を強引に引っ張って……私の横を通り過ぎていく。

何も出来ない。動くことも出来ない。

ダメだ！　こんなのダメだ！　ぐっちが遠くに行ってしまう……。

遠くにいた私がぐっちの近くににいる私の心に向かって叫んだ。

「ぐっち！」

私はぐっちの背中に声をかけた。

「……なんだよ？」

足を止めて面倒臭そうに嫌々振り向くぐっち。

「その……悪かったな。私が間違っていた」

素直に言葉が出てきた。自分で自分を止められなかった先程までの自分が嘘のようだ。大切なモノを失うことへの恐怖が私を現実に戻し、ことの重大さを私に教えてくれた。

「いや……俺も言い過ぎた」

ぐっちの声はやはりぎこちないものだった。

「……私のほうこそ、意地を張ってしまった」

なぜぐっちとこんな気まずいことになってしまったのだろう？

少しの間、気まずい沈黙が続いた。

「……渚も、もう遅刻しないように気を付けるよな？」

ぐっちは手を引いている渚に声をかける。

「……はい」

渚は私に心配そうな眼差しを向けながら、小さな声でこたえた。

「悪い智代。俺、次の授業体育なんだ。着替えとかあるから」

ぐっちはこの気まずい時間を早く打ち切りたくて仕方ないようだ。それは私も同じだった。

「あ、ああ、頑張るんだぞ。ぐっちはドジなところがあるからな、怪我などするなよ」

ぎこちない笑顔でぐっちの言葉にこたえる。無理にでもいいから、あの一瞬のイヤな時間をなかったことにしたかった。だから、私は無理に笑顔を作った。

「大丈夫、適当にやるから……」

ぐっちの笑顔もぎこちない。

「……じゃあな」

そう言うぐっちは渚の引いたまま、坂を駆け上がっていった。

ぎこちない笑顔のまま、ぐっちを見送る私。ぐっちに手を引かれている渚が一瞬だけ振り返ると、小さく口を開いた。

「……ごめんなさいです……明日からは……ひとりで登校できるよ
うに……頑張ってみます」

小さな声だった。渚は可愛くて健気な女の子あだと思う。

私と違いすぐく女の子らしい……。でも、私だって……。

「……これでも傷つきやすいんだぞ」

私は小さくつぶやいた。そして何故か目から汗が流れる。

「……」

風が吹いて葉桜が揺れた。葉桜が揺れる音に混じって、授業終了を告げるチャイムの音が聞こえてきた。私はこの学校に転入してきて、はじめて授業をさぼった。

放課後はいつも通り、ぐっちのクラスでぐっちと春原と共に過

した。

気まずいという想いもあったが、それでも「いつも通りにしてない」とぐつちとの関係がダメになるのでは」という恐怖が先に立ち、私に無理をさせた。

なにもなかったかのように振る舞う私。ぐつちもそいしていた。

馬鹿でどうしようもない奴だと思うが、この時だけは春原の存在に感謝だ。あの男が馬鹿をやってくれるおかげで、私が考えていたほど気まずくならずにすんだ。

本当に春原はギャグ用だな、存在そのものがだ……それ以外価値はないと断言できる。とにかく、今回ばかりは春原に感謝だ。

無論、春原に礼を云うつもりは全くない。普段、私に迷惑をかけている度合いに比べればこの程度は些細なことだ。それに春原を調子に乗らせたら面倒だからな。

そして帰りも、私もぐつちもなにこともなかったかのように振るまい……春原と三人で校門を出て坂道を下り、そして私はぐつちたちと別れた。

あの昼休みの出来事はなかったことになっている。それでいいはずだ。だけど、どうしても昼休みの出来事が頭の片隅から離れなかった。

いつもなら真っ直ぐ家に帰る私が、寄り道をしていた。寄り道をしていた。寄り道は良くないことだ、だが……。

こんな気持ちのまま、家に帰って家族を心配させるわけにはいかない。こんな気持ちのまま……。

寄り道と云っても、帰宅途中に寄り道する習慣などない私には特に行くあてもない。

ふと足を止めた商店街の服飾店。ショーウィンドウの前で私はずっと立ちつくしていた。

ぐつちもやはり渚みたいな可愛いらしい女の子のほうが好きなのだろうか？

ぐっちは以前、私たちは進む道が違うと云った。自分は不良だから、生徒会を目指す私とは一緒に居られないと云った。だから、私とぐっちが一緒にいるのは私が生徒会に入るまでと約束した。でも、その後は……渚とつきあうかもしれない。

……いや、渚には岡崎という彼氏がいるから、これは杞憂というものだ。でも最近、渚と岡崎はよく喧嘩している。何よりもぐっちと渚はとても仲がいい。

すごく怖くなってきた。この考えはとても怖いものだ。自分の考えが怖くなってしまう、私はうつむいた。

「親友を疑うなんて私は……最低だな」

誰に聞かせるでもなく呟いた。そしてこれ以上考えないように、自分にいい聞かせてから顔を上げた。

不意にショーウィンドウの中に飾られている、フリルの沢山ついた服が目に残る。

これはゴスロリというやつだ、知ってるぞ。クリーム色のワンピースにピンクのフリルが沢山ついている。

ぐっちもこういう可愛いのが、良いのだろうか？ 自分が目の前に飾られている服を着た、姿を想像してみる。

……。

あまり似合うとは思えなかった。やはり、こういうのは私より女の子らしい……。

例えば……頭の中に、渚が目の前の服を着ている姿が浮かんでくる。似合っていた、凄く可愛いと思う。

「はあ」

思わず溜め息をつく。

すると……。

「坂上さん」

私を呼ぶ声、大人びた女性の声だ。続いて肩をたたかれた。

「ん？」

振り向いた私の頬に私を呼び止め、私の肩に手を置いた女性の人差し指が当たる。

「ひっかった」

私を呼び止めた女性はまるで小さな子供のように嬉しそうに、そう云った。

私を呼び止めたのは美佐枝さんだった。我が高の卒業生で、今は男子寮の寮母をしている。在校中は生徒会長を務め、「全校生徒無遅刻無欠席ウィーク」を達成した伝説の人だ。私にとっては憧れの対象だ。

前に一度、美佐枝さんが生徒会長を務めていたころの話を聞きに行ったことがある。

美佐枝さんは生徒会を目指す私にとってすごく勉強になる話を沢山してくれた。私のように部屋を訪ねる生徒は男女を問わず多いと聞く。

頼りになる人だから、皆、悩み事を相談しに行くのだろう。美佐枝さん本人はそのことを少々迷惑に思っているふしがあるが……それでも相談に訪れる生徒は後を絶たないということは、美佐枝さんがいつも親身になって生徒の悩みにこたえているということだろう。

「なんか暗いわねえ」

美佐枝さんは、そういうと私の頬をむにとつまんだ。

「……」

私は頬をつままれたまま、美佐枝さんの瞳を見つめた。優しい眼差しだった、母性愛に満ち溢れている。

あの悪夢のような昼休みの出来事を話して相談に乗って貰いたい。美佐枝さんなな親身に話を聞いて貰えるだろう、だが……。

「はあ」

美佐枝さんは、私の頬から手を離すと大きなため息をついた。

「恋の病か……。青春まつただ中って感じねえ」

美佐枝さんはそう云うともう一度、「はあ」とため息をついた。

「なぜ、わかつたんだ」

美佐枝さんは人の心が読めるのだろうか？ 私は思わず聞いていた。

「あんたのその深刻そうな顔を見れば誰でもわかるわよ」

美佐枝さんは、「何言つてんの、あんた？」と呆れた顔をした。

「……そうか」

私はそんなにも深刻な表情をしていたのか。

「話を聞いてあげたいところだけど、ゴメンね。寮の連中の夕飯作つてたら、お醤油切らしてたことにきづいちゃってねえ……」

美佐枝さんはそういうとお醤油の瓶が入った買い物袋を私に見せた。

「急いで、帰って夕飯作らないとあいつら暴れるから」

少し困ったような笑みを浮かべてそう云うと美佐枝さんは、私の頭を優しくなでた。なんだか照れくさい。でも、少し心が落ち着くな……美佐枝さんにこうされると。

「あんたはかわいいんだから自信持ちなって、大丈夫」

美佐枝さんが私に優しく微笑みかける。美佐枝さんの笑顔は心を暖かくしてくれる。不思議な人だ。だが、やはり頼りになる。

「うん、実をいうと容姿には少しだけ自信がある」

私にも自然と笑みがこぼれた。でも……。

「だけど、ぐつちが『そんなんでも女の子らしくなんて扱ってもらえるのかよ？』って云つたんだ。性格にはあまり自信がないからな……」

……正直ショックだった」

あの時、ぐつちはそう言った。ぐつちの言葉が、私の心に根強く残っている。

確かにそうだ、あんな嫌なことばかり云う私なんて……そんな自分を自分で止めることが出来ない私なんて女の子らしく扱ってもらえるわけがないんだ。ぐつちだって渚のような女の子らしい女子が……。

「まったく、あいつは……」

美佐枝さんはあきれた様子でつぶやく。

「あゝ、えーっと夕飯さえ作っちゃえば、そのあとは特に用事とかないから……」

と、うつむいている私に声をかけた。美佐枝さんの言葉に私が顔をあげると、美佐枝さんは私の頭を両腕で抱きしめた。

私の顔が美佐枝さんの大きくて柔らかな胸に包まれる。心地よいぬくもり、そして……やさしい香りだ。美佐枝さんはそのまま私の背中を撫でた。

「その……気が向いたら、私の部屋にでも来なさいよ……ね？」

美佐枝さんは困り顔でそう云うと私から離れた。

「うん」

私が頷くと、美佐枝さんは小さく「はあゝ」と溜め息をついて「じゃあね、元気だしてね」と、私の肩をポンと叩いてから去っていった。

うん、さすがは美佐枝さんだ。頼りになる人だ。この人なら何か良いアドバイスをくれるに違いないと思う。

私は美佐枝さんの部屋の前まで来ていた。家には、生徒会選挙で遅くなるからと電話しておいた。嘘をつくことはいけないことだ。

だが、家族にいらぬ心配をかけるわけにはいかない。私は一度深呼吸をしてから、トントンと美佐枝さんの部屋の扉をノックした。

「……はい、はい」

少しの間をおいて、美佐枝さんの声が聞こえてきた。

「……」

夜に訪問するのは失礼だと思ったが……礼儀を守る気持ちより不安の方が大きかった。

このままではぐつちとの関係が終わってしまうのでは、と胸に痛みを感じるほど不安だ。

これはすごく身勝手な相談だ。美佐枝さんには関係ない話を夜遅くに相談するなんて失礼なことだと自分でも理解している。

だが、不安でどうしようもなかった。誰かに話を聞いて貰い樂になりたい。

その想いが私に非常識な行動を起こさせた。でも、頭で非常識と理解してるから言葉を発つせないでいる。

「ん？ もしかして坂上さん？ ちょ、ちょっと待ってね」

私が黙っていると、美佐枝さんは部屋の中で何事かぶつぶつとつぶやいてから、ゆっくりと扉を開けてくれた。

「……来ちゃったのね」

美佐枝さんはまた少し困った表情を浮かべていた。

「来てはまずかっただろうか？」

やはり迷惑だっただろうか、不安になってくる。

「まあ、あたしから誘ったようなもんだしね」

そう言つて美佐枝さんは部屋の奥にあるベットを見た。

今から寝るつもりだったのだろうか。美佐枝さんのことだ、早寝早起きを心がけているのだろう。

「ええーと、とりあえず……上がってく……よね？」

非礼をする罪悪感よりも、今この胸にある不安を一刻でも早く取り除いて欲しい気持ちが強かった。

「すまない、そうさせて貰えるとありがたい」

美佐枝さんにうながされ、部屋の中へとお邪魔する。

「とりあえず、適当に座って」

腰を落ち着けると美佐枝さんが紅茶を入れてくれた。私は小さく息を吐くと、紅茶を口にした。

「で、なにがあつたの？」

美佐枝さんが優しい表情でといかけてくる。

私は出来るだけ気持ちを抑え、ゆっくり丁寧に昼の出来事を美佐枝さんに話した。

美佐枝さんは私が話をしている間、一度も口を挟まず真剣な面持ちで私の話を聞いてくれた。

「……なるほどねえ」

私が話し終わると美佐枝さんは、深い溜め息をついた。

「あんた、初恋でしょ？」

ストレートにものを言う人だ。だが、それが美佐枝さんの魅力でもある。

「うん」

私は素直にこたえた。家族以外の人間のことをここまで想ったことはない。これが私の……初恋なのだと思う。

「そりゃあ嫉妬ぐらいしても仕方ないんじゃない？」

「嫉妬？ 嫉妬ということはつまり私はぐつちと渚のことを妬いていたということか……うん、それは納得だ」

今までぐつちが異性に優しくする度に感じてたこの痛みは嫉妬だったのか……今までそういう経験が全くないからわからなかった。

「そう、妬いてたの。だから、あんたは自分でもわからないうちにイヤな態度をとっちゃうつてわけ。嫉妬ってね、そういうものなのよ。嫉妬するなんてかわいいじゃない、女の子らしい、女の子らしい」

美佐枝さんは笑顔でうんうん頷いた。

女の子は嫉妬するものだと言ったことがある。私は嫉妬していたのだから、それはつまり女の子らしいということなのだろう。ただ……。

「でも、ぐつちは『そんなんで女の子らしくなんて扱って貰えるかよ？』と云ったんだ」

私の言葉に美佐枝さんは苦笑しているようだった。

「ぐつちは馬鹿だからねえ。あんたの嫉妬に気づいていたのか、いないのか……いずれにしろ、あんたをここまで傷つけちゃったんだから、最低よねえ」

いたずらっぽくそう云うと美佐枝さんはベットのほうを見た。

「ん？ どうかしたのか？」

「え？ ううん、なんでもない、なんでもない。うちのネコがね…

…」

ベットの中にネコがいるのだろう。ベットに敷かれた布団がガサガサと動いていた。

「あんたはすぐ女の子らしいわよ。女の子らしすぎるぐらいに女の子らしい女の子よ」

そうなのだろうか。美佐枝さんがそう云ってくれるならそうかもしれない。

だけどぐっちは……。

「ぐっちはさあ、嫉妬されるってことに慣れてないから、あんたを傷つけるようなことを言っちゃったんだけど、あいつはあいつなりにあんたのこと想ってると思うよ」

美佐枝さんは私の心を見透かしているようだった。

「だけど、私は渚に比べれば女の子らしくないと思う」

それだけは自分でもわかる。美佐枝さんの云う通り私が女の子らしいとしても、渚のほうが私よりも女の子らしい。ぐっちが私のことを想っていてくれたとしても、渚のほうが……。

「……あの子、かわいいもんねえ。でも、それとこれとは別。あんたは十分、女の子らしいわよ。ぐっちだって、あんたのそういうかわいいところに惹かれてるんだと思うよ」

そうなのだろうか。あんなイヤな態度をとってしまう私のことをぐっちは想ってくれているのだろうか……。

「私はぐっちに想われているのだろうか？　ぐっちに想われるような女の子らしい女の子なのだろうか……」

慰めでもいいんだ。美佐枝さんの言葉をもう一度、聞きたかった。それで、自分に自信を持ちたかった。それなのに……。

「いや、おまえは女の子らしくなんてないだろ」

あらぬ方向から私の神経を逆撫するような下品な声が聞こえてきた。

もし、今この場に書いただけで人を殺せるノートがあったら……私は真っ先にこの声の主の名前を書くだろ。

こいつの名前は……。

こんな下品な声の持ち主はひとりしかいない、春原だ。春原が何時の間にか美佐枝さんの部屋に入ってきたいた。

「春原あゝ、なに勝手に入ってきてるのよお！」

美佐枝さんが怒りをあらわにしてそう云った。不法侵入されたのだから怒るのは当然のことだな。云うまでもないが不法侵入は立派な犯罪だ。春原の頭は常識というものはないだろうか……。

「いや、なんか美佐枝さんの部屋から声が聞こえたから、ラグビー部のゴリラどもに襲われてないか心配になってはせ参じたわけですよ。それにしても智代ちゃんも可愛い所あるねえ。自分が女の子らしいかどうかを美佐枝さんに相談するなんてねえ。でも、全然ダメだから。僕にひどいことをする智代ちゃんは女の子らしくなんてありませうん」

くっ、ムカツク。人が気にしていることを土足で踏みにじり馬鹿にするなんて……男のことじゃないだろう。

普段なら春原を蹴り飛ばして終わるのだが……昼の出来事が胸に刺さり動けない。

「あれ？ 蹴るのかなあ？ 男を蹴るような女の子は女の子らしくありません……」

どうせ私は女の子らしくない。ぐっちも私みたいな女なんか捨てるに決まっている。

「うう……」

目に涙が溢れ溢れ落ちそうになった瞬間に……突然、何かがベツトから飛び出した。そして……。

げしっ！ げしっ！ げしっ！

「ぎゃあああああ」

春原が言い終わる前に春原は突然の乱入者に蹴り飛ばされ、宙を舞い落下した。

「春原…… テメエに智代の何が分かったよ。 テメエが何時も殴られ

てんのは智代にちよつかいをかけてるからじゃねえのか？　つまり
テメエの自業自得だろうが！　……智代のこと何も知らねえ癖に悪
く言わないでくれよ」

「ぐ、ぐっち……」

突然の乱入者はぐっちだった。私は今の状況が理解できなかった。
なぜ、ぐっちがここにいるのだろうか。理由はわからないが、今ま
での話は　当然、聞かれていたんだろうな。私は美佐枝さんに恥
ずかしい相談をしていたのかも知れない。自分が女の子らしいかど
うか、しつこく聞いたりして……それを、ぐっちに全部聞かれてい
たんだ。

「よ、よお……」

ぐっちは気まずそうな表情で私に声をかけた。

「そ、そのお……ぐっちはさあ、あんたのことであたしに相談しに
きてさあ。で、絶妙なタイミングであんたが来ちゃたから……」

美佐枝さんが事情を説明してくれていたが、私はそれを聞かずに
美佐枝さんの部屋を飛び出していた。ぐっちの顔をまともに見るの
がはずかしかったんだ。

私は美佐枝さんの部屋を飛び出し、そのまま走り続けた。ぐっち
は私と美佐枝さんの会話を聞いていた。私が美佐枝さんにあんな相
談をしているのを聞いたぐっちは、私にどんな言葉をかけてくるの
だろう。すごく不安で怖いんだ。

だから、私は走った。ひたすら走った。そして気がつくと校門へ
と続く坂道へ来ていた。ぐっちと言い争いをしてしまった坂道。ふ
と、私の足が止まる。

ここで、ぐっちと渚が一緒にいる場面さえ出くわさなければこん
なことにはならなかったものを……。

「……ぐっち」

無意識のうちにあいつの名前を口にしていた。葉桜はあの時と同
じように風に揺れている。不意に後悔の念が押し寄せる。

私はなんで美佐枝さんの部屋を飛び出してしまったんだろう。こうしてしまったことによってぐつちとさらに気まずいことになってしまった。恥ずかしかったのは確かだ。だが、だからと云ってぐつちから逃げてしまつてはどうにもならない……。

それでも引き返すことは出来なかつた。一步一步、なんの考えも無しに坂道を上つていく。

「……あれは？」

坂道の途中で、私は足を止めた。

そこに渚がいた。渚は、坂道の途中で立ちつくしていた。

「こんな時間にどうしたんだ？」

私は心配になり声をかけた。云い争いになつたとは云え親友であるのは変わらない。

渚は振り向くと私に不安げな眼差しを向けた。 「……やつとここまで来ることが出来るようになりました」

少し迷つてから、渚はそう答えた。

「どういう意味だ？」

「朋也くんやぐつちさんに背中を押してもらわなくても……ひとりでここまで来ることが出来るようになったんです。でも、ここから先はひとりではなかなか行けません」

そう云うと渚は申し訳なさそうに笑つた。

「ちようど、お父さんに買い物を頼まれたので明日のために練習していました。誰もいない学校なら大丈夫だと思つたんですが……難しいです。でも、頑張ります。ひとりで学校に行けるようにならなくてはダメですから……」

儂い笑顔だつた。苦しいはずなのに笑つていた。自分勝手な私が情けなつた。

「今日は……すまなかつた」

私は自分のことしか考えていなかった。渚の気持ちなつ考えていなかった、親友なのに……。

「……私が悪いんです。私こそごめんなさいです」

渚はそういつと深々と頭を下げた。

「ぐつちさんは智代ちゃんのお氏さんだと知ってたのに……ぐつちさんの優しさに甘えてしまつて」

「違うんだ」

私は渚の言葉を遮つた。そうじゃないんだ……。

「正式な彼女なんかじゃないんだ。ただ一緒に居てもらっているだけなんだ、私の我が儘で。それなのに私はおまえに嫉妬して……」

「直ぐに彼女になれると思います」

今度は渚が私の言葉を遮つた。私は渚の瞳を見つめた。精一杯の笑顔が浮かんでいた。

「そつだといいいんだが……」

渚の笑顔に應えるべく言葉を絞り出すが自信はない。こんな私をぐつちは思ってくれるのだろうか……。

やっぱり、不安だ。

「そつなんじゃない？」

不意に背後から軽い調子の声が聞こえてきた。

「え？」

振り返ると、そこに……。

ぐつちがいた。少し息が荒かった。私を追い掛け全力で走つてきてくれたようだ。ぐつちの後ろには美佐枝さんもいた。

「そつだつてよ」

美佐枝さんが私に向かって微笑んだ。私はどうしていいかわからず立ちつくしていた。ぐつちも照れくさそうに笑っているだけだった。

「ほらっ」

と、美佐枝さんがぐつちを私のほうへと押しやった。

「……ぐつち」

ふたりの距離が一気に近くなろうとしたその時、なにかがものすごい勢いで私とぐつちの間へと入り込んできた。

「おー、智代ちゃんはやっぱり女の子だ！」

私の胸に手を触れ下品な笑みを浮かべる春原。油断していたとはいえ、ぐっち以外の男に胸を触られるとは……しかも、こんな最低な男に。抑えようのない怒りと悲しみが込みあげてくる。

「この変態かつ！」

私は叫んで春原を蹴って蹴って蹴って蹴って蹴り続けた。

げしっ！ げしっ！ げしっ！ げしっ！ げしっ！

「ぐえええええつ！」

人のものとは思えぬ絶叫とともに夜空へと消えていく春原。そのまま消えてくれたら嬉しいのだが……残念だが、春原はゴキブリ並の生命力を持つから無理だろう。

私は「ふう〜」と大きく息を吐くとぐっちの顔を見つめた。

「こんな私は女の子らしくないか？」

自分で言っておいて、なんだか……照れるじゃないか。ぐっちに認めて欲しい。そして誉められたかった。

つまり、私は不安だったんだ。安心出来るモノが欲しかったのだ。離れてしまっても……私達は何度でもやり直せるという確たるモノが。

「いいや、十分すぎるぐらい女の子らしいよ。それに……かわいいパンツだったしな」

ぐっちは笑顔で即答してくれた。その答えに一切の迷いはなかった。ぐっちが私のことを愛してくれているとわかる。それがすごく嬉しい。

……ん？ パンツ？ 怒りのあまり春原を全力で蹴ってしまった。思えば下は制服のスカートだ。……見えていたということか！ まあ……ぐっちにならパンツを見られる程度は別に構わない。見せるのは初めてという訳ではないしな。

だが、このシチュエーションでそんなことを平気で言うのはおかしいだろう。ここは黙ってキスするのが普通じゃないのか……。そ

もそも、ぐっちは女心を理解してなさすぎる。……きつい灸を与え
るべきだろう。

「ぐ、ぐっち！」

慌てて逃げ出すぐっち、追い掛ける私。美佐枝さんはそんな私達
を笑顔で見つめていた。そして渚も笑顔だ。もちろん、私もぐっち
も笑顔だ。変なわだかまりはもうない。

たった一日の出来事、些細な出来事。でも、私にとって大切な思
い出になったと思う……。

些細な出来事のひとつひとつが輝いていた。忘れかけていた輝き
のひとつひとつを今は鮮明に思い出すことが出来る。

心の奥にありつづけた輝きを、長い時を経ても消えるこのなかっ
た輝きを、一瞬の輝きを、ひとつひとつ思いだし……もう一度心に
刻み込む。

不安を消し去るように。舞い散る雪のようにきらきらと輝く想い。
私はそれを永遠のものにしたい。この想いが雪のように溶けて消
えてしまうのではないかという不安と戦いながら、ひたすら待ち続
ける。

失った大切な時間を取り戻すために……きっと永遠へと続く道が
あると信じて。

智代編完結

（後書き）

私の人生はまだまだ続いていくが……この話はこれにて一応の終りを向かえる。

正直、私の話はつじつまがあわないことや、分かりにくい内容が多いと思う。

話は率良く分かりやすく作るのが基本だと思うが……私は皆に考えて欲しいんだ。そうすることで作品により感情移入してくるか、私は思う。

話を読ませるだけで終わるのではなく、何故そうなるのと疑問を持たせるようわざと分かり難いように描いた。ただ話を読むで終わるのはつまらなくないだろうか？

疑問はこの話上で解決するものもあればこれから描くSSによつて解決する問題もある。

長くなったが……私の稚拙なSSを最後まで読んでくれてありがとう、皆の暖かい優しさに感謝する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8591m/>

【CLANNAD二次創作SS】坂上智代長編？

2010年10月8日13時51分発行